ある帰化朝鮮人の記録

ある帰化朝鮮人の記録

著者トノ協定ニヨリ検印ヲ省略

姜（きょう）魏（ぎ）堂（どう）
カン　キ　ダン

1901年＝鹿児島県下にある“薩摩焼”の原産部落に生まる。
1925年～慶応義塾大学経済学部卒業後，一年志願兵として入営したり，東毎・大阪朝日・時事新報など前後10年に至る記者生活や，区役所の臨時雇員・Japan Photo Library（内閣情報部の外廓機関）の会計係から理事になったり……
1939年＝渡華して南京と上海で5年半を過ごす。
1946年～第一回読売演劇文化賞受賞後，菓子製造所の集金人や各種機関紙の編集で口を糊す。
1948年～在日朝鮮人連盟の機関紙“朝連中央時報”の嘱託となりおよそ1年間張切る。
1949年～また機関紙・誌の編集その他の遍歴時代に戻つて今日に至る。
1966年＝“生きている虜囚”（記録・随筆・戯曲集）が新興書房より発刊さる。
1968年＝“神を畏れぬ人々”（戯曲集）同上

¥1,800

1973年4月20日第1版発行

著者　姜　魏　堂
発行者　岡　崎　元　哉
印刷者　小　幡　忠　司

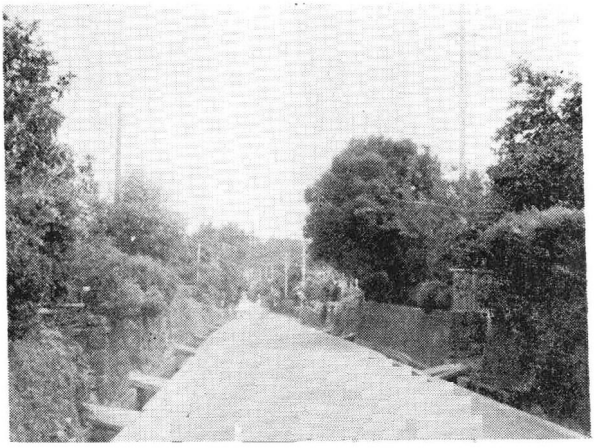
発行所　東京都千代田区富士見2～6 雄山閣ビル内　同成社
TEL (880) 3681 振替東京 156415 番

© Printed in Japan The Dohsei Publishing Co.,

0036-041073-5256

ある帰化朝鮮人の記録

姜　魏　堂



苗代川の中央通り＝著者の生家（右端の石垣）を入れて下（シモ）の方を撮ったので、実際の長さは上（カミ）の方を合わせてこの倍くらいある。人影の見えないのは、ここも過疎地化した証拠だ。

同成社版

ふたたび姜君のために

村山知義

一九三四年五月「テアトロ」創刊当時応募してきて推薦作とされた作品ではじめてその名前を知った姜魏堂君が、戦後いちはやく上海に於ける体験を劇化して読売演劇文化賞を受けることになった「神を畏れぬ人々」の時も、私は選者のひとりとして強く推した。

そのような関係で、彼が自分の出生地である薩摩焼の原産部落について、内部から蒐めた資料を主にした「生きている虜囚」という本が刊行された時、ちょうど「忍びの者」連作第三篇「真田忍者群」に関連して調べてあった豊臣秀吉の朝鮮侵略当時の捕虜についての資料が沢山あったので、私はそれを利用して、彼を紹介するための序文を書いたことがあるが、こんどは彼自身の記録風な自叙伝が出るという。

私が読んだのは、実は、ある季刊誌に連載されていた間の、いわば中国大陸篇とでもいうべきところだけなのだが、そこにも、階級的差別にほかならぬ長い間の人種的差別に抗しながら自分たちの文化を持ち伝えてきた人びとの子孫が、いま現実にどのような生き方をしているかがうかがわれる。尤も姜君の著作を見ると、一般の部落出身者は自分たちの身許をひたかくしにしているらしいから、彼の場合は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

むしろ例外なのかもしれないが、それもしかし楯の表裏として考えられぬこともない。とすれば、今なお彼らをそういう境地に追いこんでいる者は一体誰なのか。

ともあれ日本人には、アメリカ人の黒人差別を笑う資格はないのだ。この事実の前に、われわれは頭を垂れねばならぬことを、ここにも繰返しておきたい。同時にこうした差別問題は、階級的差別をなくす闘いによることなしには解決できないという自明の理もまた、銘記しなければならないのである。

なお近来、朝鮮の古代文化・芸術のわが国への伝来問題がにわかにクローズ・アップされているようだが、私は彼の前著の時も記しておいたとおり、ずっと以前からそのことに大きな関心を持っていたので、それが今もなお日本の文化にどのように深い影響を遺しているかに、ただただ驚いている者であることを、日本は一日も早く朝鮮民主主義人民共和国と国交を結んで古代の親交関係に戻るべきだということと併せて付記しておきたい。

ある帰化朝鮮人の記録

目　次

序・ふたたび姜君のために……村山知義
南京の章……二
上海の章……七三
被爆の章……一五九
遍歴の章……二三五
敗北の章……二六五
あとがき……三三九

ある帰化朝鮮人の記録

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

南京の章

「これは君、一体なんだね？」

場所は南京日本総領事館内の吉野領事室。質問者というよりも詰問者の彼は、タブロイド型四頁の商工会議所所報を大きなテーブルの上に広げていた。それは私が一人で執筆し編集していたもので、その号は南京特務機関長の長い講演を特集したものであった。

日本政府は、事変の見通しが暗いところから和平についての様々なテを打ったが成功せず、とうとう汪兆銘をひっぱり出して反蔣政権を樹立させることになり、その〝還都〟に備えて先づ首都の大通りにある大きな日本商社を目立たぬ裏町へ移転させることを計画した。支那派遣軍総司令部下の南京特務機関からその通告を受けた大商社の支店長たちは、勿論挙って大反対であった。といっても、総軍に対し正面切っての反対はできないので、領事連中にこそこそと運動する傍ら、彼らはみんな商工会議所の常任理事だった関係上早速役員会を開いて反対の決議をした。が、交渉の相手は〝鬼補佐官〟といわれた特務機関の次席少佐である。酒匂会頭はそのお使い役を書記長の私に命じた。

「貴様は」と、上申書を読み終った鬼補佐官は果して目を剝いた＝「軍の方針に反対するのかッ！」

「それは常任理事会の決議です。私はそして、そこで飯を食っています」と私は答えた＝「私個人の考えとは全然関係ありません」

「なに？　貴様はそれぢゃどう思う？」

「私個人としましては、還都の有無に拘らず、あんな大きな家屋を全部日本人が占有しているのには反対です」＝あれはみんな、宣撫工作が主要使命である筈の当の特務機関が〝敵産家屋〟として没収したものを適当に分け与えたものではないか、とまでは、それが前任者時代のことなのはわかっていても、流石に言えなかった。

「うむ」と、補佐官は唸った。

「殊にあの、慰安所なるものが大通りにのさばっているのは、醜態だと思います」

「それなんだよ」＝急に鬼補佐官は、声を落とした。〝慰安所〟とは、司令部と一緒に行軍する従軍記者に次いで、治安の見通しが立ち次第入って来る〝一旗組〟と殆ど同時に送られて来る将兵相手の〝慰安婦〟＝人肉提供者達の巣のことだ。次いでやって来るのが、芸妓を抱えた料理屋の親父ども。やがて大商社の支店や出張所ができ始めると、加盟任意の「商工会」とか「商工会議所」といったものが結成される。

「しかし、私も子供の使いみたいに、どなりつけられましたといってこのまま帰る訳には参りません」

「そんなこと言ったってお前……」

「講演会を開いて、その趣旨をよく徹底させて載きたいんです」

「……そうか。よかろう」＝鬼補佐官は、必ずしも鬼ではなかった。

こうして開かれた〝機関長閣下〟の講演の、それは特集号なのであった。尤も、その効果は遂に挙がらず、会議所はもとより総領事館頼むに足らずと見た支店長たちは、接渉を本店のある東京へ移した。そして日本は、資本主義国家である。利権の獲得・確保なくしてなんのための戦争ぞや！――結局、泰山鳴動して出て来たものは鼠一匹＝料亭や慰安所だけが、もっと大きな家屋を貰って裏町へ移転したにとどまった。軍官をこっそり招待するにもされるにも、その方が遙かに便利とは相成って事は落着したのだが……。

さて、領事の意向を計りかねた私は、間の抜けた顔で「所報ですけど……」と答えた。

「そんなことはわかっている！」と、吐出すように言った彼は、しかし短い間をおいて所報を取上げながら続けた

＝「だがこんなものが果して所報かね？　君は一体、よその会議所の所報を見たことがあるのか？」
「あります。送って来てるものには全部目を通しています」＝かけろと言われないので、私は直立不動のままだ。
「それでも君は」と、領事は持っていた所報を卓上に置いて腕を組み、立派な椅子にふんぞり返りながら続けた＝
「これを所報だと言いはるのかね？……あーん！」
「所報です」と、面倒臭くなって私は応じた＝「只今の予算と陣容とで作れる、ギリギリの立派な所報だと思っています」
　領事の顔から血の気が退いた。しかし上体を起こし、今度は指先だけを組合わせて両腕を卓上に載せ、静かな口調で言った＝「軍官の動きも出てないし、肝腎の物価表もないしね」
「軍人の動静を報せることは禁じられていますけど、物価表や指数の動きは必要だと思います。でも、それを調べて歩く〝人〟がいないんです」
　三ヵ月前＝一九三九年の暮に創立されたばかりの南京日本商工会議所には、私と、中国人の集金人と小孩子（シャオハイツ、子供のこと、ここではボーイ）のたった三人きりなのだった。
「ここにあるだろう、経済課に」
「あ」と、私は口ごもった。わかりきったことに気がついていなかったからである。
「どうしてそれを貰わないんだ！」と、私の狼狽を目敏くも見てとった領事は声を高めた＝「あア！」
「気がつきませんでした。これからそうさせて戴きます」と、私は素直に兜を脱いだ。
「これぢゃまるで新聞だからねえ」と、領事も語調を柔げてまた他の古い号を拾い上げた。
「でも読者は会員ですから、日本商社が現実に当面しているいろんな根本問題の解説の方が、もっと大事なんぢゃないでしょうか？　何れにしても、雑誌様式よりも新聞の方が、較べ物にならない程ずっと安くってしかも速くできるんです」

「しかし君」と、領事は眉間にシワをよせた＝「所報なんだろう、もともとこれは？」
「お言葉ですが」と、私は恐縮の態を装って抗弁した＝「よそで出している所報は相当な経費をかけ、それがやれるだけの陣容を以て作ってるんです。それをただ、形式的に真似てみたところで……」
「わかった」と、持っていた所報でテーブルを叩いた領事の顔は紅潮していた＝「しかし君は、その、もっと、なんだ……もっと、連絡を緊密にし給え、連絡を！　ここは商工会議所の監督官庁なんだ！」
南京日本商工会議所の建物は、木造ではあるが外観は立派な三階建て＝もと相当な料亭だったらしいのを、これも〝敵産家屋〟として軍が接収し、それを無償で交付したものだ。そして階下は特務機関から貰った土産品（どさんひん＝その地方の特産品）の展示場に充てられ、二階がガランドウの事務所、その一角に会頭室、三階は会議室となっている。
「てなわけで、どうにもこうにも」と、私は声を立てて笑いながら酒匂会頭に報告した＝「手がつけられないもんですから、とにかく謝っておきましたがね」
「まづい！」と、太った体を椅子からのり出すようにして聞いていた会頭が、上体をひきながら言った＝「それはまづいですよ、領事は我々の直接の上司なんですからね」
「まづい！」とまた呟いて、組んでいた腕を解いた会頭が、やがて言った＝「よし！　こうなったら人をふやしましょう、人を。そのために寄附を募るんだ。私も出しますよ、私も。そして、一日も早く館令による会議所にして貰いましょう。否も応もなく加盟させる会議所にね。……そうだ、あなたひとつ、上海へ行って来て下さい。上海の会議所で、所報の作り方をよく教わって来て下さい」
私にとっては、それは陣容の問題であって技術の問題ではなかったが、黙っていた。
初めての上海出張に、私は土曜日の夜行を選んだ。南京の情勢調査に一遍やって来たことのある或商社の上海出張所長であるイトコの処に泊って、一日遊ぼうがためである。従兄のいるアパートはすぐにわかったが、ハガキで

報せておいたにも拘らず本人は不在、そして妻君は帰国中であった。私はどこか安宿を探すべく退出しようとすると、「あの、お待ち下さい」と、日本人の女中があわてた＝「ゴルフが済み次第まっ直ぐに帰るから是非って……。それにあの、金さんの奥さまからも頼まれてるんです」

「金？　誰です、それ？」

「川越さんのお嬢さんでございます。ちょっとお待ち下さい」

その女＝川越英子と私との間には、数年前にちょっとした交渉があった。私の郷里は薩摩焼の原産部落で、そこは〝文録・慶長の役〟（朝鮮では『壬辰丁酉倭乱』という）当時島津勢によって強制連行された捕虜の武将や陶工その他の技術者たちの後裔から成る〝純粋なる朝鮮人の大部落〟だ。（詳しくは拙著「生きている虜囚」参照）いや、少なくとも私の少年期まではそうであった。藩の為政者たちの隔離政策の下、周囲の嘲笑や迫害の中から、薩摩焼は生まれたのである。

その部落＝『苗代川』は、周辺の農村地帯に、山上の工業部落として最後には君臨するようになったのだが、それでも、というよりは、だからこそ却って県民の偏見はいよいよ強く、三百余年にも及んだ部落民の孤立は決して解かれはしなかった。そこへ、耕地に乏しい山の上の製陶部落に不況の波が押寄せ始めると、部落の若者たちは先を争って、富める者は東京や大阪へ、貧しい者は教員や巡査や船員になってその多くは当時の植民地へと移住し、事情を知らぬ他府県の女、つまり日本人と結婚し、そして両親が死ぬと墓地までも移して転籍し始め、部落は見る見る寂れていった。

私も長兄の命令で、遙々東京から墓地の土を採りに出向いた。言われた通り先づ叔父の諒解を求めようと思ったが、叔父は、上海にいる妻の弟、つまり義弟の妻女が娘をつれて福岡の船小屋という温泉に来ており、そこへ招ばれて行って不在だというので、私は独りで墓の土を缶に詰めた。《お父ッちゃん、おッ母はん、決してここを動くんぢゃありませんぞ！　私だけはきっときっとここへ戻って来るんですから》と念じながらであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com